

第243回 俳句サロン「道草」(6月) 句会記録

6月9日(月) 曇天。朝の気象情報では「夕刻は雨になる確率が高く、お出かけの方は雨具のご用意を忘れないように」と聞かされました。ですが、句会のある新橋は、お陰様で雨に濡れるようなことはありませんでした。今日もリアル句会への出席者は少なかったのですが、皆さんの提示された語句の解釈、句意の解明討議など、勉強になることが沢山あり、良かったのではないのでしょうか。

○ 投句に参加された方々のお名前(14名)

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○ 句会に参加された方々のお名前(7名)

多佳さん、傘吉さん、晶如さん、月草さん、和感さん、一光さん、白然。

今月の天賞句と投票の多かった句は、下述の通りです。

◎『ぽつねんと梅雨ひと色に野の佛』	傘吉	天2☆5
◎『咲き切りてはらりと散りし薔薇の花』	晶如	天2☆5
◎『電線の雨つぶキラリ雨あがる』	歌多音	天2☆4
◎『胡麻の花祖母の姉さんかぶりかな』	荻女	天1㊦4
◎『昼下り水の動かぬ植田かな』	多佳	天1㊦3
◎『芍薬の落花の音に驚きぬ』	一光	天1㊦3
◎『リラの花遠き想ひを呼び起こす』	まさあき	天1㊦1
◎『ゴンドラを降りて千畳お花畑』	晶如	天1㊦1

選句の発表

投票総数5票、天賞推挙票数2票を獲得された傘吉さんの句「ぽつねんと梅雨ひと色に野の佛」が、今月の一番でした。鬱陶しい梅雨空にぽつねんと佇む野の石佛、その色は心も沈む灰色一色、というところでしょうか。実は上五の「ぽつねんと」という語は、今は亡き住田先生が主宰された「道草」の仲間(東京兵庫県人会「道草」の今は亡き久保竹里さん)が、ある時期、毎月のように「ぽつねんと」を句に詠み込んで披露されました。僭越ですが、その句も披露させていただきます。「ぽつねんと飄逸げなるつくしんぼ」、「ぽつねんと一人手酌の温め酒」(竹里詠)。

次に、晶如さんの句「咲き切りてはらりと散りし薔薇の花」も、同じく投票総数5票、天賞2票を獲得しました。「咲き切り」、しかる後に「散る」という薔薇の花の決して長くない生涯と、人の一生を照らし合わされたのでしょうか。票数が伸びました。

次に歌多音さんの句「電線の雨つぶキラリ雨あがる」が、投票総数4票、天賞推挙票2票を獲得しました。この句は梅雨の晴れ間のひとときを捉えられたのでしょうか。お日様がちょっと覗いた梅雨の晴れ間、とどまっている電線の雨つぶがきらりと光ります。ほっとする雨上がりです。「あらっ、雨が上がったのね。今のうちに買い物に・・・」というようなシーンを思い浮かべておりました。

次に荻女さんの句「胡麻の花祖母の姉さんかぶりかな」が、得票総数4票、天賞推挙数は1票、お祖母さんが「姉さんかぶり」をして畑に入っている姿、お祖母さんの頑張り屋マインドが伝わってきます。姉さんかぶりの懐かしい姿に、かえって新鮮さを感じる句になりました。

次に多佳さんの句「昼下がり水の動かぬ植田かな」が、投票総数3票、天賞推挙票1票を獲得しました。中七にありますように「水の動かない植田」です。暑いのでしょうか。こんな時、さあ一っと一陣の風が舞い、植田にさざ波が立てば、これは涼しいでしょうね。

次に一光さんの句「芍薬の落花の音に驚きぬ」も、同じく投票総数3票、天賞推挙数1票を獲得しました。芍薬落花の音に驚くとは・・・、別世界の庭の静けさをも併せて感じさせられます。好いシャッターチャンスを捉えられました。

今月は梅雨入りを句にしたものが多くありました。前述の傘吉さんの句「ぼつねんと梅雨のひと色野の佛」、歌多音さんの句「電線の雨つぶキラリ雨あがる」の他に、多佳さんの句「昼下がり水の動かぬ植田かな」もまた、梅雨時の雨上がりの一瞬をキャッチした句でしょう。

もう一句、さらに披露したい梅雨の句があります。これもまた自然の強さをアピールしています。和感さんの句「土砂降りと晴れを交互に入梅かな」です。梅雨のど真ん中の土砂降りの鬱陶しさを経て、晴れ間の時には熱中症が心配になる炎暑です。気をつけながら入梅を受け入れ、最終的には極暑の夏を迎えることになります。人間はタフです。

6月の句会記録はここまでです。そして今月は、小川軽舟著「名句水先案内」の紹介を致します。その冒頭の「はじめに」で当たる部分を抜き書きしました。昨年、角川書店から販売されている本です（初版発刊令和6年4月、2000円）が、月刊「俳句」に連載している頃、住田先生がコピーして私たちに配布して下さいました資料の一つでした。

小川軽舟著『名句水先案内』（角川俳句コレクション）冒頭の一言

麗らかな陽気に誘われて、これから読書の皆さんと名句を探る旅に出ようと思う。私が水先案内を務め、皆さんの乗る船を先導する。満足のゆく旅になるよう精一杯に努める所存である。詩歌にとって何より大切なのは古典を残すことだ。短歌ならば名歌、俳句ならば名句が歳月を経て古典になる。古典が残せてこそ詩歌は長い命を保つ。

その過程には、多くの読み手の存在が欠かせない。名句は権威が一方的に決めるものではない。和歌の勅撰集においても、よみ人知らずの名歌のように、作者の名が消えてなお愛誦された歳月がその歌の背後にあることを忘れてはなるまい。高浜虚子の選、山本健吉や大岡信の鑑賞が優れた俳句を見出すという契機もちろん重要だが、彼らの選んだ俳句が広く愛誦されなければ名句になったとは言えない。

さまざまな場で夥しい数の俳句が生まれる。俳句の読者は総じて俳句の作者でもある。自分の属する句会、属する結社で、多くの俳句に出会う。私も「鷹」の主催者として「鷹」の仲間の俳句を丹念に読む。しかし、読み手がそれぞれの場に閉ざされていては、俳句の世界の共通の財産としての名句は生まれない。私が心許ない水先案内を買って出るのは、垣根の向こうの俳句に広く目を向けてほしいという思いに駆られてのこと。名句を育てるのは読者の皆さんなのだ。

私がお案内する範囲は今から遡ること十余り、具体的には2020年以降に刊行された句集とした。同時代の俳句から名句を見出すことが目的なので、同時代の範囲として一応の区切りを付けてみたものだ。句集が出ていないばかりに取り上げられない俳句が少なからずあることをお断りしておく。取り上げる俳句には、既に名句としての定評を得ているものもあれば、そうでないものもある。そのうち幾つかでも皆さんの記憶に残り口ずさまれば本望である。

この十年は、いわゆるゼロ年代に続く十年ということになるが、収められた作品は句集刊行の年よりさらに遡るので、二十一世紀の俳句を眺めるということにもなるだろう。その間、俳句は岩盤のように変わらない部分が大半を占めつつ、変化も生まれている。

戦後俳句を牽引した大正生まれの世代が去り、昭和生まれの時代になった。団塊の世代、そして私がかつて「俳句」の連載で取り上げた「昭和30年世代」の俳人たちがベテランとして重きをなす年齢になる一方で、俳句甲子園などの若い世代がゼロ年代の新しい世界観を背景に俳句に変化を促している。

先ず私自身が読者として楽しむべく、さまざまの時代の様々な俳句観に基づく作品を広く取り上げていきたいと考えている。名句を探る旅を通して、この十年がどういう十年だったかということも考えてみたい。それはまた、その次の十年を想像する手がかりにもなるだろう。

(白然写)